

「新しく生きる」 一使徒行伝講解説教 42-

使徒言行録 18章 24節～19章 10節

説 教 本庄侑子牧師

イエス・キリストの名による洗礼を受けて、キリスト者として生きていく。それは、自分の丸ごと全てがイエス様の中にどっぷりと浸かりきってしまうということです。過去も未来も、今日を生きるこの体も、この体で営む小さなわざも、その丸ごと全てがイエス様と、そのお働きの中に浸かりきってしまうということ。それも死を超えて終わりの日まで続く壮大なイエス様のストーリーの中に浸かり切ってしまうということです。しかし、その約束があまりにも偉大すぎて、私たちは自分の理解が及ぶ範囲にその約束を閉じ込めてしまうことがあります。

かつて、アポロという人がいました。パウロの伝道の旅を通して福音を耳にした一人だったのでしょう。イエス様のことを熱心に、正確に教えていました。しかし、洗礼はヨハネの洗礼しか知りませんでした。つまり、ヨハネが語ったのと同じように、イエス様が来られたから、悔い改めて行いを正していこうと、人にも自分にも諭し続けていた、ということでしょう。

そもそも、ヨハネの言葉には、人の心を入れ替えさせるような説得力があったのだと思います。ヨハネは祭司の家系に生まれ、荒れ野で禁欲的な生活をしました。大工の息子として生まれ、罪人と食事をしたイエス様よりも、その生き様や風貌には迫力があつたことでしょう。

私たちにもあるでしょう。偉大な人との出会いを通して、心を入れ替えて生きようとする。ヨハネもそうして人々に訴えました。イエス・キリストが来られるから悔い改めよ、と。人々はまた、そのような言葉をずっと待ち望んできました。罪が裁かれることのないままになる。それは、本当はよくないことだと思ってきた。しかし、長い間、預言者は現れず、罪が指摘されることのない時代が続いたのです。

そんな中、颯爽とヨハネが現れました。神様を信じればいいことがありますよ、というご利益ではなく、罪について、悔い改めについて語りました。ヘロデ王を叱りつけ、パリサイ派やサドカイ派を批判しました。人々は、辛辣な言葉に突き刺されつつも、長年のモヤモヤが晴れわたるような思いになったかもしれません。アポロもまた、そのヨハネにならう仕方でもイエス様のことを伝え、自分自身にもそれを課していたのだと思います。悔い改めて神に立ち返れ、神様に喜ばれる生活をせよ、と。

そうしてアポロが熱心に語っていた時、プリスキラとアキラがやってきて、もっと正確に神の道を説明しました。アポロの話聞いて、何かがおかしいと思ったのでしょうか。悔い改めよ、正しく生きよ、という言葉は、イエス様を迎えるための道備えの言葉ではあっても、イエス様による最終的な言葉ではなかったからです。その後、パウロもやってきて人々に語りかけました。厳しい言葉によって反省し、心を入れ替え、自分一人で頑張る。そこでとどまっていけないか。主イエスの名による洗礼を受け、聖霊を受けたのか、と。

主イエスの名による洗礼を受ける。これは、主イエスの中にどっぷりと浸していただくという言い回しです。聖書において「名」は、その人の存在と、その人によって実現されたことの全体を指します。洗礼によって、イエス様の名の中に浸され、私たちの存在も、過去も未来も、死の先に至るまで、イエス様の存在と、そのお働きの中にどっぷり浸されるのです。このお方の中に浸されるとき、聖霊を受けます。私たち自身が聖霊の宮となり、その体と人生全体が、聖霊なる神様の働き場となるのです。

イエス様が私たちに求めておられるのはシンプルなことです。罪を反省し、心を入れ替え、歯を食いしばって荷物を背負え、とはおっしゃいません。私のもとに来なさい。洗礼を受けて、私のものになり、聖霊をいただきなさい。それが、イエス様が求められたことでした。

イエス様は最も罪深い、恐ろしい所にも入って行かれました。そこでこそ、ご自分の肉を裂き、血を流して死に、復活して、新しい命をもたらしてくださいました。このイエス様にあっては、もうどこにも一人ぼっちの場所はありません。イエス様が立ち入り、イエス様が働いて、死から命をもたらす場所にしてくださいませ。

「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく作られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、全てが新しくなりました。」(コリント人への第二の手紙5章17節) 誰でもそうなれます。神様は独り子の命と引き換えに、今朝も、あなたをみもとへ引き寄せておられます。

(記 本庄侑子)